

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：15101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19986

研究課題名（和文）英作文の文法的正確さを向上させるメタ言語的訂正フィードバックの研究

研究課題名（英文）A study of metalinguistic corrective feedback to improve grammatical accuracy

研究代表者

青山 聡（AOYAMA, Satoshi）

鳥取大学・地域学部・講師

研究者番号：80907767

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：英作文における正確さの向上をもたらすメタ言語的訂正フィードバックは、日本人英語学習者（中高生）にとって好意的に受け入れられ、自身の英語力向上に必要なフィードバックであると認識されていることが明らかとなった。また、訂正フィードバックとして伝えるメタ言語的情報は、量が多く、詳細なほど学習者の自己訂正を導き、文法学習の成功を導くというわけではなく、各学習者の自己訂正にとって必要な質と量のメタ言語的情報を与えるには、学習者同士でメタ言語情報を共有し、不明な点を教え合う協働学習の機会が必要であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語の教育現場においてメタ言語的訂正フィードバックはこれまで、均一のメタ言語的情報を紙面に記載し、学習者全員に配布することで与えることが多かった。しかし本研究により、この方法では自己訂正に必要な情報を手に入れることができない学習者もいることが判明した。よって情報を与えるだけでなく、その後に学習者同士で話し合う機会を与えることも重要であるという本研究成果は、英語教師にとって有益な情報となりうる。

研究成果の概要（英文）：This study revealed that metalinguistic corrective feedback, which improves accuracy in English composition, is preferred by Japanese learners of English (junior and high school students) and is recognized as necessary feedback for improving their own English skills. Metalinguistic information conveyed as corrective feedback does not necessarily lead to the learner's self-correction and success in grammar learning. In order to provide metalinguistic information needed for each student, it became clear that it was necessary to have opportunities for learners to share metalinguistic information among themselves and to teach each other unclear points.

研究分野：英語教育学

キーワード：メタ言語的訂正フィードバック 自己訂正 英作文

### 1. 研究開始当初の背景

学習者が犯す英作文上の誤りに対して、口頭ではなく、文字により与えられる訂正は筆記による訂正フィードバックと呼ばれている。英語教育の分野では、この筆記による訂正フィードバックが短・長期的な英作文における正確さの向上を導くのかどうかという観点から研究されていた。

先行研究では、筆記による訂正フィードバックは正確さの向上に効果があるということが明らかになっており、さらにその中でも学習者自身に正しい形式を導き出させる、つまりは自己訂正を促すメタ言語的訂正フィードバックが近年注目を浴び、それが英作文の正確さの向上に与える効果について、他の訂正フィードバックと比較され検証されつつあった。しかし過去の研究では、遅延事後テストを含んだ研究デザインが十分採用されず、また、言語生成上ではなく、言語理解上における正確さの向上のみを測定するテストが多く採用されていたという問題があり、筆記による訂正フィードバックが第2言語発達に与える効果を包括的に理解するには不十分であった。また、訂正フィードバックの効果に影響を与える英語熟達度などの学習者内要因が十分考慮されておらず、様々な英語熟達度の学習者を一斉に指導する教室環境に結果を還元できないという課題もあった。

それを受けて筆者は、事前・事後・遅延事後テスト研究デザインを採用し、様々なテストを用い、メタ言語的訂正フィードバックを含めた数種類の訂正フィードバックの効果を英語熟達度別に検証してきた。その結果、中高生のような英語熟達度の低い学習者には、メタ言語的情報を紙面(フィードバックシート)で与え、自己訂正を促すようなメタ言語的訂正フィードバックが効果的であることを明らかにした。

しかし、用いた測定群のテストスコアを見てみると、スコアを伸ばせていない、つまりは正確さの向上が見られない学習者がいることや、スコアの平均点の向上はまだまだ期待できることから、フィードバックシートに記載するメタ言語的情報の質と量及びその運用方法についてそれぞれ改良する必要性を感じていた。

### 2. 研究の目的

英作文における正確さの向上をさらにもたらすメタ言語的訂正フィードバックとはどのようなものかを明らかにするため、以下の2点について調査することを目的とした。

(1) フィードバックシートに記載すべきメタ言語的情報とはどのようなものかを明らかにする。

(2) フィードバックシートの効果を高める運用方法とはどのようなものかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 「フィードバックシートに記載すべきメタ言語的情報を明らかにする研究」

メタ言語的情報の内容(質)と量が異なる2種類のフィードバックシートを別々の学習者集団(熟達度は均一)に与え【独立変数】、言語理解・生成上の正確さの伸びを測るテストを事前・事後・遅延事後に実施し【独立変数】、テストスコア【従属変数】を統制群も含め比較検証する。具体的には、ある文法規則の説明が例文と共に記載されている一般的なシートと、個別の誤りに対して詳細なメタ言語的情報をさらに載せたシートを用意する。一般型フィードバックシートより詳細型フィードバックシートの方が学習者の文法的理解も促され、より正確さの向上に効果があると予想される。しかし、与えられるメタ言語的情報が多くなることで情報過多となったり、読みづらくなったりと、最終的には各学習者が自己訂正に必要な情報を得られない可能性もある。また詳細なメタ言語的情報でも学習者によっては不十分な場合もある。これらの理由により2つのシートの効果を実際に比較検証する必要があると考えた。統制群の設定は、メタ言語的 WCF の効果が未確定であることを鑑み、メタ言語的訂正フィードバックの有無が測定具の値の変化に影響を与えているか否かを判断するためである。

(2) 「フィードバックシートの最適な運用方法を明らかにする研究」

フィードバックシートを別々の学習者集団に異なったやり方で使用させ【独立変数】、言語理解・生成上の正確さの伸びを測るテストを事前・事後・遅延事後に実施し【独立変数】、テストスコア【従属変数】を統制群も含め比較検証する。具体的には、個人でシートを使用する方法とグループで協働的に使用する方法とを比較する。共有することでより高い効果が生じた際、その原因を探るべく、学習者間でどのような情報のやり取りが行われ、自己訂正を可能にした言語的支援となり得たのかを質的に分析する。シートを用いてメタ言語的訂正フィードバックを与えるやり方は、学習者全員に一斉に配布できて手間が省けるという利点はあるが、記載されているメタ言語的情報が学習者によって自己訂正に不十分であったり、情報過多となり必要な情報が探せなくなったりという問題があった。そのような問題は、フィードバックシートを共有し、他の学習者と協働で訂正し合うことで解決されることが考えられた。

#### 4. 研究成果

上記の研究目的(1)(2)を明らかにする前段階として、筆記による訂正フィードバックに対する学習者や指導者の好みや認識を調査する研究を行った。学習者の好みや認識は訂正フィードバックの効果に影響を与える学習者内要因として注目を浴びている。先行研究において、学習者が好み、自分の言語発達により効果があると認識している訂正フィードバックを与えた方が、効果が高くなることが明らかになっている。よってメタ言語的訂正フィードバックに対して日本人英語学習者(中学生)や英語教師が持つ好みや認識を明らかにする研究を行った。中学生645名を対象としたアンケート調査の結果、語彙よりも文法に対する訂正を好むこと、一部ではなく全ての誤りに対する訂正を好むこと、一部の誤りを訂正する場合は意味の伝達に支障をきたす誤りに対する訂正を最も好むこと、中学生は最初から正しい形式を求めるが、高校生はまずは文法説明や例文をもとに自己訂正を試みたいと思い、またそうすることが最も正確さの向上を導くと認識していること、教師、友人、機械による訂正を重要であると認識していること等が明らかになった。中高英語教師27名の回答と比較したところ、学習者は全ての誤りに対する訂正を好むが、教師は一部の誤りに絞って訂正を与えるべきだと認識している等の相違点が示唆された。以上の結果より、教師から与えられ、学習者に対して文法的誤りの自己訂正を促すフィードバックとなるメタ言語的訂正フィードバックは、学習者に好意的に受け入れられ、自身の文法能力の向上に重要であると認識されていることが明らかとなった。よってメタ言語的訂正フィードバックの効果をより高める方法を探る本研究は、教師が実際の指導現場で運用するためにも有益なものとなりえることが確認された。

先述した(1)「フィードバックシートに記載すべきメタ言語的情報を明らかにする研究」より、以下の2点が明らかとなった。ひとつ目は、たとえ詳細なメタ言語的情報を与えようとも劇的にスコアが向上することはないということである。確かに、詳細なメタ言語的情報が文法項目に対する理解を深めた結果、正確な文法知識の獲得という段階では、短期的には一般的なメタ言語的情報よりも効果はあったが、その効果は長く保持されることはなかった。また、実際の生成上の正確さを測る和文英訳テストでも、メタ言語的訂正フィードバックを与えることの効果は統制群との比較により確認できたが、フィードバックシートに記載する情報の差が効果の差を生むことは確認できなかった。フォローアップアンケートの回答からも、たとえ詳細なメタ言語的フィードバックを与えようとも、学習者によっては正確さを向上させるのに効果的な筆記訂正フィードバックにならないことが示唆された。また明らかになったふたつ目は、ある文法を正しく理解し正確な知識は持っていて、その知識を用いる際にかかる認知負荷により正しく生成できないこともあるということである。また逆に言うと、正しく生成できないからと言って与えたメタ言語的フィードバックが有効ではないとは言いきれず、その前段階である正しい知識の獲得には効果があるかもしれないということである。

(2)「フィードバックシートの最適な運用方法を明らかにする研究」では、フィードバックシートを用いて協働でメタ言語的情報を与え合いながら訂正していく方が、個人でフィードバックシートを用いて自己訂正するよりも、知識の正確さを測る文法性判断テストだけでなく、生成上の正確さを測る和文英訳テストの両方においてスコアが高くなったことが明らかとなった。また、学習者同士のやり取りを質的に分析した結果、学習者同士で互いに支援を与えあうことで、より各学習者に適したメタ言語的情報の獲得につながるということが明らかになった。具体的には、学習者間で、特に重要なメタ言語的情報への焦点化が促されたり、追加の説明が与えられたりすることで、文法への理解が深まっていた。

以上の研究より、メタ言語的訂正フィードバックは学習者に好意的に受け入れられ、重要であると認識されていることから、指導現場でもこれまで以上に実践されるべきであると考えられる。ただし、従来の学習者全員に同じ内容のメタ言語的情報を与えたり、ただ詳しい内容が記載されているフィードバックシートを配布するだけでは、学習者によっては情報が不足していたり、理解できてなかったり、或いは情報過多になり、メタ言語的訂正フィードバックの恩恵が受けられない場合もある。それを解決する方法の一つとして、フィードバックシートを共有し、それを用いて協働的に訂正をしあう方法がある。各学習者にとって自己訂正及び正確さの向上に必要なメタ言語的情報の付与のためには、フィードバックシート配布後のペア・グループワークが推奨されるだろう。

本研究では、メタ言語的訂正フィードバックの効果を、文法性判断テストと和文英訳テストを用いて検証した。しかし、指導現場では、エッセイライティングテストなどより認知的負担が多いテストも用いられている。よって今後は、種類の異なるライティングテストにおいてメタ言語的フィードバックが正確さの向上に与える効果を検証していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 青山聡	4. 巻 18 (3)
2. 論文標題 筆記による誤り訂正に対する日本人高校生英語学習者の態度と運用上の留意点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 43-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青山聡	4. 巻 46(3)
2. 論文標題 英語ライティングにおける正確さ向上に向けた筆記訂正フィードバックに対する好みと認識に関する調査研究 ~日本人中高生と中高教師の比較~	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青山聡	4. 巻 46(3)
2. 論文標題 和文英訳上の誤りに与える2種類のメタ言語的筆記訂正フィードバックが直説法・仮定法の正確さに与える影響	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------